

絵図で探訪 江戸時代のさかき

はじめに

今回は、江戸時代の絵図の上でふるさとを探訪してみましよう。千曲川に関連する、年代の違うものを二枚用意しました。古い年代から順にご案内します。

延宝六年千曲川絵図全体図



1. 延宝六年 千曲川絵図

(竹内範雄家文書)

延宝六年(一六七八)に坂木村と五明村との境界争いの際に描かれた絵図(写)です。争点となった柳原が大きく描かれており、実際の距離感とは異なります。当時の坂木村

は、金井村・横尾村・中之条村と共に、越後高田藩領でした。対する五明村は、網掛村・上平村・鼠宿村・新地村と共に松代藩領です。概観すると、千曲川が木の根の様にならねり、大きな中洲ができています。南(上流)

を上にして、東西に支流が描かれています。線で主要な道を、丸囲いで村や集落を描き、山々が周縁に連なります。北の山には「村上義清 山城」とあり、その麓に横吹坂が大きく描かれ、その山肌には千曲川がぶつかっています。現在の

の国道一八号線は明治十年に開通したもので、江戸時代は風が強く険しい横吹坂を通らねばなりませんでした。

細部を見てみましょう。東岸で南北に走っている道は、北国往還です。上から鼠宿村、金井村、横尾村、中之条村、四ツ屋、田町、横町、坂木宿立町、大門町、新町とあり、鼠宿村と四ツ屋の脇に木が描かれています。根元に土の山があることから、一里塚を表していると思われる。一里塚にはエノキやマツが植えられたといいますが、この二つの塚には何が植えられていたのでしょうか。

どちらも現存はせず、伝承のみが残っています。

四ツ屋付近の川岸には、逆さに描かれた社が見えます。千曲川がぶつかる場所にあたるので、水除けの神として伊勢宮を祀っていたのでしよう。千曲川沿岸の地域には、今も伊勢宮が多く見られます。また、社がなくなっても「伊勢宮、伊勢社」など地名に残っていることがあります。それらは、かつてその土地が水害に悩まされたことを物語っています。

千曲川が東に蛇行する地



横吹坂



鼠宿一里塚



四ツ屋一里塚

点から横吹まで支流が描かれています。それに沿って「本田」「田」と書き込まれており、農用水として利用していたと思われます。

山々には、部分的に木が茂って見えます。これは、御林（幕府や領主が管理・保護する山林）や持林（村や寺社、個人持ちの山林）を表しているのでしょうか。

西岸には、千曲川から取り入れた六ヶ郷用水が描かれています。網掛村と五明村の農地を潤しているのは、現在も見られる光景です。五明村付近に小さな丸囲いがあり、「新田」と書

かれています。江戸時代になつて開発が行われたことがわかります。この絵図は、残念ながら



鼠宿一里塚跡付近



四ツ屋一里塚跡付近

伊勢宮



上平村や荻屋原地区が描かれていませんが、江戸時代前期の坂城や千曲川に触れることができる貴重なものです。また、坂木宿ふるさと歴史館では、同年の裁許絵図を展示しています。ここで紹介したものとよく似ていますが、坂木宿や馬場などが描かれており、興味深いものです。

2. 寛政九年 千曲川絵図

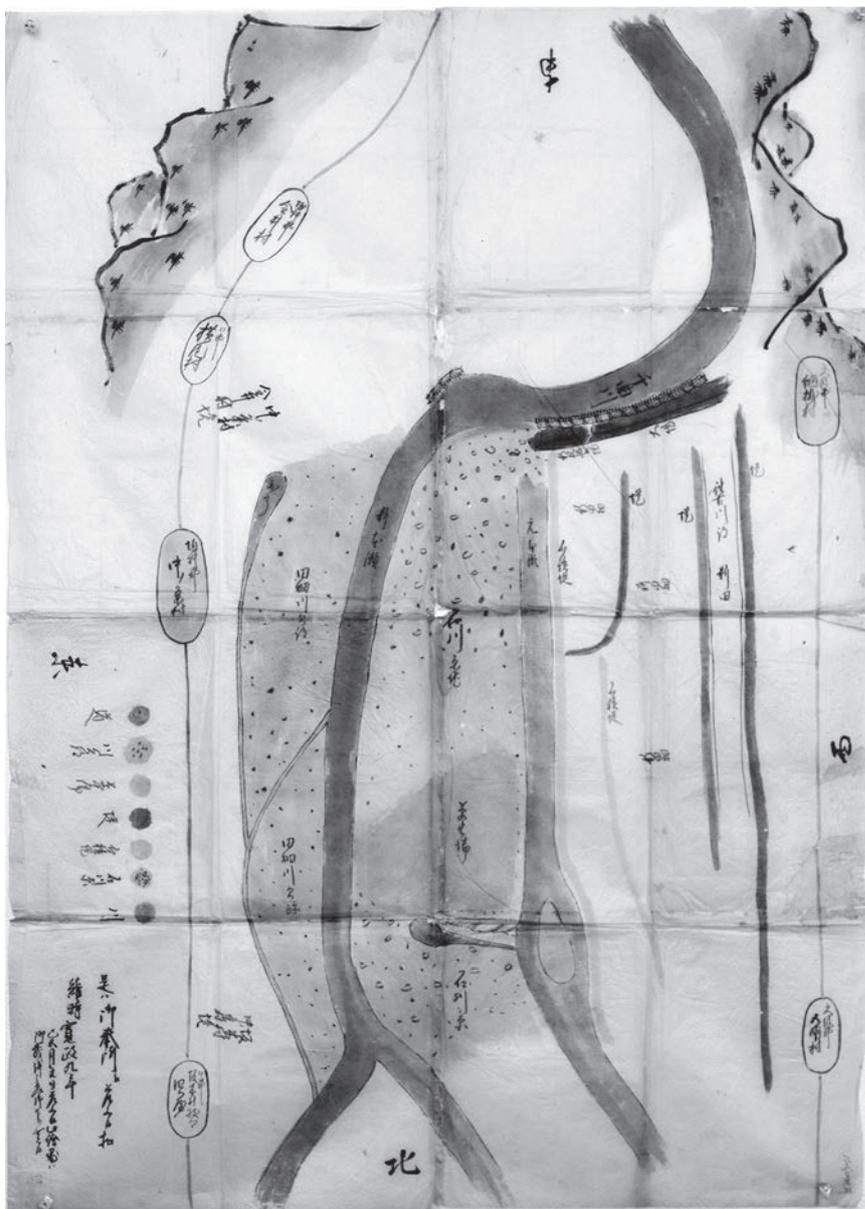
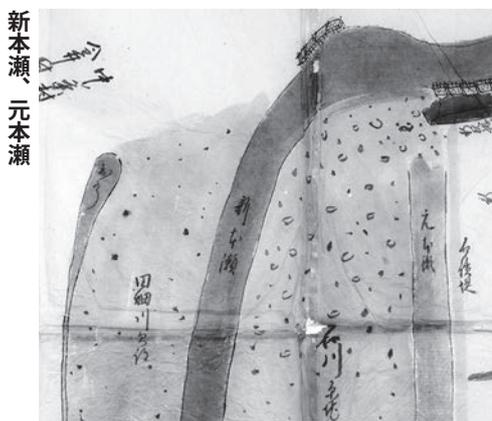
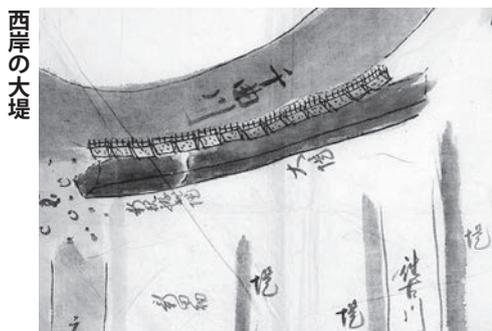
（竹内範雄家文書）

寛政九年（一七九七）に中之条村と網掛村との争論に際して作成された絵図で

す。両村の間の河川敷が大きく描かれています。

1と2の絵図の間には百年以上の開きがあり、その間、寛保二年（一七四二）に戊の満水と呼ばれる千曲川大洪水を経験しています。戊の満水の翌年には、西岸の網掛村、五明村、力石村にかけて、堤防の修築工事がありました。その時に幕府から工事役として派遣された役人・大草太郎左衛門の名から、この大堤防は「大草堤防」と呼ばれました。現在の連続堤防は、こうした江戸時代の堤防を基にしています。

西岸に描かれたいくつもの筋は堤防を表しており、一部は大草堤防と思われる。「堤」「石積堤」と書き分けられ、構築素材の違いがわかります。ひととき大きな横一文字は、「大堤」と書かれ、川表に杵（木杵）を組んで石を入れ、川に沈める水制工）が並んでいます。大堤の脇には石が積み、漁場としたようです。



寛政九年千曲川絵図全体図

この大堤の下流には二本の流れがあり、東は「新本瀬」、西は「元本瀬」です。元本瀬の西は数々の堤により「新田」が広がり、東は「石川原」の間に「草生場」があり、作付けができそうです。大洪水の後の工事は、網掛村に新たな農地をもたせたと見えます。

即座に崩し、元本瀬に流れを戻すよう訴えました。河川敷の僅かな農地でも、村民のくらしにかかわる大問題だったのです。

1、2の両絵図は、中之条村の名主・竹内覚左衛門が控として持っていたものです。1の絵図は、戌の満水より前の千曲川が描かれ

一方の中之条村は、これらの堤工事や漁場のために千曲川の流れが変わり、引き込んでいた枝瀬が新本瀬となつて少々の大水でも農地が荒れるうえ、対岸の中之条村分の農地で網掛村が勝手な作付けをしている、と網掛村を相手に訴訟を起こしました。新本瀬の東に「田畑川欠跡」が広がっています。これは1の絵図の「本田」

「田」の場所だと思われ。中之条村は、漁場の石積みも即座に崩し、元本瀬に流れを戻すよう訴えました。河川敷の僅かな農地でも、村民のくらしにかかわる大問題だったのです。

おわりに

災害が起こるたび、過去の災害を記した歴史資料が注目されます。令和元年の東日本台風（台風十九号）以降、それらを広く共有し、活用する機運が高まってきました。歴史資料には災害や復旧事業が記録されており、それはそのまま、地域の脆弱性とその対策方法を示唆しています。

坂城町の中にも、これだけ情報量のある絵図が残っていました。文化財センターでは、「古文書等閲覧室」を設け、寄贈された古文書等をどなたでも閲覧できるよう整理しています。ホームページに資料目録を掲載していますので、お気軽にご利用ください。

(本間 美麻)